

【はじめに】

私が「グローバルが生み出す力」のゼミで活動しようと考えた理由は、将来外国人の方と共に同じ職場で働き、グローバルに活躍したいと考えるからだ。その際に、国や文化など様々な点で違いがあり、その時に暮らしの中で起こりうる問題について学びたいと考えた。

私たちは、文化や価値観の違いについて知るため、立命館アジア太平洋大学へ行き留学生を対象にインタビューを行った。そこには全体生徒のうち半数が国際学生が占めており、彼らに「日本に住む上で不便なことは何か。」「別府市は多文化共生が進んでいると言われていたが、その都市に住むことのいい点は何か。」と言う質問をした。回答には、ポジティブな点とネガティブな点があった。その中でもネガティブな問題が目立った。例えば、ベトナムから来た留学生が日本人学生に対して謝るときに、相手の手を握り驚かれた。しかし、この行為は彼女の母国の文化であり、驚かせるつもりはなかった。また多くの方は、日本語が喋れないことで困ることや、喋れないことによる差別を受けたことがあると言っている方もいた。

このように、文化の違いによって生じる問題は、互いの文化への知識が不足しているために起こってしまったと考える。では、どうすれば外国人と日本人との間に起こる文化の問題は解決できるのか。これが僕たちの探究テーマである。

【序論】

僕たちが考えたのは、みんなが文化の違いによって生まれる問題について知る必要があることだ。そこで僕たちが様々な問題について探究し、広めようと考えた。その方法として、異文化理解を啓発する冊子を作ることを決めた。冊子の内容としては、僕たちの探究のきっかけや行ってきた活動、文化の違いにより起こりうる問題をわかりやすく知ってもらうために漫画にまとめたものを制作した。まず、それを国際高等学校の中に設置する。その後アンケートをとり、感想や異文化への興味の変化があったか調査する。高校生のうちから知っているとして将来海外から来た人たちと働く上で問題を生じることがなくなると思う。ただ文を書いたものを見てもらうよりも漫画にして表した方が見てもらう人たちにより興味を持ってもらうことができると予想した。今後は高校内だけでなく、市役所や中学校にも設置したいと考える。

異文化理解には四つ段階がある。第一段階は異文化に触れる機会の少ない小学生までを指す。第二段階は中学校に入学し、英語の授業やALTの先生たちとの交流で異文化に興味を持つことである。第三段階は高校や大学等で異文化を学ぶ知識が増え、実際に海外留学やホームステイを通して自己の文化から外の文化へ出ていく過程で、最終段階は相互の文化の相違点や類似点も理解して異文化を寛容な態度で受け入れることができる段階に達することである。(松倉信幸(1997).「異文化理解コミュニケーションとカルチャーショック」.『鈴鹿短期大学紀要』17巻, pp.73-81.)

私たちは今回第一、二段階の人たちに広めると偏見を持つことなく成長していくと考えた。例えば、日本にいる外国人の全員が日本語を話すことができないということではないということです。それらの人に間違いのない情報、事実を教えることが最終目標である。

【本論】

パンフレットを見た後に、今後外国人に対しての対応を変えようという意識の変化があったか、また先ほど述べた第一、第二段階の人たちに大きく影響を与えると予想するかという問いに対する意見をアンケートを用いて聞きたいと考える。まずは国際高校の同じゼミの生徒たちを対象に

するつもりだ。そこから得ることができた意見をもとにパンフレットを改善し、校内の全学年の各教室に約二週間設置しその後再びアンケートをもとに改善を行うつもりだ。国際高校の生徒は他の奈良県の高校生よりも留学生やALTの先生と接する機会が多いと考えている。そのためよりの確かな意見を貰えると予想できる。また、彼らが実際に留学生から聞いた不快な思いをした経験を聞くことができる。インターネットから得ることができる情報よりもより正確である。これらの情報を集めた後に県内のその他の学校や県内の国際交流センターのような外国人と日本人が交流する場所に設置していただく予定である。

アンケート結果では「街中の外国人に対する印象が変わった。」「問題の現状について知った。」と言う回答を期待している。その先には学校での差別についての授業に対する考え方が変わる未来があると信じている。文化を学んだ上で各生徒それぞれの意見が出てくる。意見交換する機会を設けて異文化理解を深めていきたい。その結果、偏見を持って異文化を学ぶ学生数が減り、それによって生じる問題も少なくなるだろう。

もちろん調査の対象者全員の意見が良い方向に行くとは限らない。「興味を持たなかった。」という回答が来た場合、調査の根本が崩れてしまう。内容を理解出来なければ調査ができない。今の私たちの問題解決は異文化理解を推進することだ。しかし、興味を持って私たちの探究を理解してもらわないと成り立たないので、誰もが分かりやすい漫画と説明文を作る必要があると考える。これがアンケートから得ることができるであろうネガティブな意見である。

異文化理解能力の習得に関しては、その習得方法及び評価基準共に曖昧である点が多い。また、その定義の曖昧さ故に、異文化理解能力は概念の存在そのものが疑問視されることが多々あり、この能力を証明することは非常に困難であるとされている。上述のように、「異文化理解とは何か」という認識さえもきちんと確立されていない状況の中、教育現場では「国際理解の基礎を培う」という指導要領の目標を追求することが求められているのである。「英語が話せれば、国際交流が出来て、異文化理解も生まれる」というような安易な図式に結び付けられやすい。このような考え方は、1970年代に多く唱えられた「接触仮説2」にあたるが、近年では異文化体験のみが優れた異文化理解や異文化感受性をもたらさないとする説が主流である(Shaules,2007)(竹内愛(2012).「異文化理解能力」の定義に関する基礎研究『共愛学園前橋国際大学論集』,1号,pp.105-112.)。現在、生徒たちが「異文化理解という定義を知らぬまま国際理解の基礎を培う」という指導要領の目標を追求することが求められている。

パンフレットを読んで偏見を持つことなく異なるルーツを持つ人と過ごせる未来があると予想する。相手の文化を理解していると自国の文化と異なる部分があったとしても相手の行動や言動を理解することができる。また、異文化を解釈し、自国の文化と関連付けることの出来る技能と、ある文化と文化的習慣・慣習について新しい知識を得るための能力が身につくと考える。新しい知識を習得するということは新しい考え方や価値観が身につく、海外の人と関わる際に相手の考えを受け入れることができるようになる。そうすることで国ごとの対立が緩和されると考える。他国の文化を尊重し合い、他者を理解することで寛大になれるだろう。

これが実現すると、紛争を防ぐことができるだろう。紛争とは「当事者相互間で、相手方の行為自体に対する働きかけを行う直接的なあらし(社会過程)」として定義される(六本佳平(1973).『民事紛争の法的解決』.岩波書店,339.)。相手の行為が国の文化を尊重しているならば、それを理解し受け入れなければならない。昨年11月に立命館アジア太平洋大学で行ったインタビューの回答を用いて例を示す。ベトナムから来た女性の留学生に聞いた例を用いる。ベトナムには謝罪の際に相手の手を掴むという文化がある。彼女は日本に来て間もない頃、誤って日本人学生の足を踏んでしまった。その時に、彼女は母国にいた時と同じように手をつかんで謝罪した。その時、日本人学生は日本にはない文化を目の当たりにして驚いた。留学生はいつも通りの行動をしたにもかかわらず、受け入れてもらえなかったため、ショックを受けた。

この時に、もしお互いがお互いの文化を知っていると発生しなかった問題だと考える。私たちはこのような問題を漫画に表し、その問題の原因と解決策をパンフレットにまとめようとしている。今回の問題の原因は、文化を知らなかったということだ。留学生も日本の大学に入学するのだから、日本と母国の文化の違いを学んでおく必要があった。また、日本人学生も相手の出身国には

このような文化があるのだなという寛容さを培う必要がある。その寛容さを培うためには、様々な文化を学び、新たな考え方や価値観を習得し、世界にはこんな文化があるのかと感じなければならぬ。また、偏見やネガティブなイメージを持つことなく文化を学ぶ必要がある。小学生や中学生などの異文化に触れ始める世代に偏見を持つことなく文化を知ってもらわなければならない。私たちが文化摩擦によって生じる問題の原因と解決策を学ぶことで、彼らが今後海外の人たちと接する上で、どのように関われば良いかを学ぶことができると期待している。

【結論】

2021年11月に行われた立命館アジア太平洋大学での異文化交流会でインタビューを行った事を通して、私たちの探究テーマが定まった。その際に様々な文化摩擦による問題を知った。その時に私たちはこの問題解決に貢献したいと考えるようになった。その方法として、学んだ問題を漫画として表して、それと共に問題の原因や解決方法をパンフレットにまとめて県内の学校に設置しようと考えた。また、小学生と中学生は英語の授業が始まったり、ALTの先生との関わりが増え、異文化に触れ始める期間である。その世代の彼らに向けて作成することによって、偏見を持つ事なく異文化知識を蓄えることができると考える。そうすることによって、新たな考え方や価値観を修得し、広い視野を持って物事を考えることができるようになる。この取り組みを進めることによって、多くの若い世代の人が世界で活躍できる国際人になれる事を期待している。幼い頃から異文化を学ぶことで、彼らが成長する中で国際系の仕事に興味を持ったり、多言語習得に興味を持つだろう。このことから、日本国内からさらに世界で活躍する人が輩出されると考える。国際系問題に興味を持っていないにしても、幼い頃から異文化に触れるとより興味を持って問題解決に貢献しようと考えてもらえるだろう。

もしお互いがお互いの文化を知っていると発生しなかった問題だと考える。私たちはこのような問題を漫画に表し、その問題の原因と解決策をパンフレットにまとめようとしている。留学先での問題のほとんどの原因としては、留学生と現地の人々が互いに文化を知らないということだ。留学生は現地の大学に入学するのだから、現地の国と母国の文化の違いを学んでおく必要がある。また、現地の学生も留学生の出身国にはこのような文化があるのだなという寛容さを培う必要がある。その寛容さを培うためには、様々な文化を学び、新たな考え方や価値観を習得し、世界にはこんな文化があるのかと感じなければならない。また、偏見やネガティブなイメージを持つことなく文化を学ぶ必要がある。小学生や中学生などの異文化に触れ始める世代に偏見を持つことなく文化を知ってもらわなければならない。私たちが文化摩擦によって生じる問題の原因と解決策を学ぶことで、彼らが今後海外の人たちと接する上で、どのように関われば良いかを学ぶことができると期待している。先ほども述べたように私たちは異文化理解の促進を目的としている。まずは奈良県内の学校内への設置を目指す。その際の問題としては、学生にパンフレットを見てもらえるかどうかである。

【おわりに】

この探究を通して、将来自分が職を持った際も、異文化理解の促進をしていきたいと考えている。私は将来自分の店を持ち、飲食業界で活躍する人材になりたいと考えている。私は自分の店を日本人のみならず、他の国の人でも来店し、楽しめる店を作りたいと考えている。そのために、自分の知らない文化などを実際に感じ、知るために海外留学をしようと思う。日本とは違う人との関わり方や、食文化の違いを知ることができることを期待している。そこで得た経験をもとに、誰もが過ごしやすい環境を提供できるようにし、来店してくださったお客さんとコミュニケーションをとる際、異文化理解を広め、少しでも多くの人に理解が広まるよう努めたい。

